令和3年度 国立大洲青少年交流の家 教育事業

サバイバルキャンプ (4年目)

1 事業概要

小学6年生(講話のみ保護者参加)を対象に1泊2日の事業として実施した。参加者は防災に関する講義を受講した後、避難所体験として寝袋での就寝体験、暗闇体験、火おこし体験、野外炊飯等、様々な体験を行い、突然起きる災害時の対応等を学ぶことができた。

2 事業の目的(ねらい)

近年日本各地で大規模災害が発生する頻度が高くなっており、防災力向上は 喫緊の課題となっていることから、危機回避に必要な知識や技術等を身に付け るとともに、防災や減災への意識を高める。



3 企画のポイント

避難所等で想定される活動(避難所での生活、非常食作り)を体験し、災害時の対応等に必要な技術、知識を身に付けられるプログラムを企画した。

充実した活動が展開されるよう最初に防災に関する講話を聞くこととした。技能を身に付けるだけでなく参加者同士で協力すること、コミュニケーションの大切さが分かること、避難所生活でモラル等に配慮して行動すること等、体験を通して理解を深めることで突発的に起きる災害時に役立つ学びや経験ができると考えた。

- 4 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
- 5 後 援 大洲市教育委員会
- **6 期 日** 令和3年11月27日(十)~11月28日(日)
- 7 場 所 国立大洲青少年交流の家
- 8 対 象 小学6年生 (講話のみ保護者参加)
- **9 参加人数** 小学6年生(8名)保護者(講話参加者8名)
- 10 講 師 二 神 诱 氏 (愛媛大学社会連携推進機構防災情報研究センター副センター長)

11 日 程

【1日目】 【2日目】

13:30 受付開始 6:30 起床 14:00 開講式 7:25 検温

14:30 「防災って何だろう?」 (講話) 7:30 朝食・清掃・後片付け

16:00 「寝床・簡易ランタン作り」 8:40 退所点検

18:00 夕食・検温 9:00 「火起こし体験」 19:00 「暗闇体験」 10:00 「防災クッキング」

20:00 入浴 12:30 閉講式

22:00 就寝準備・就寝 13:00 アンケート記入・解散

12 内 容

(1) 「防災ってなんだろう?」 (講話)

愛媛大学社会連携推進機構防災情報研究センター副センター長、二神 透 氏の講話を聴くことで、防災に関する知識を高め、防災について考えることができた。

(2) 「寝床・簡易ランタン作り」

武道場で男女に分かれ銀マットと寝袋を使用した。寝床を作って避難所体験を 実施した。簡易ランタンは限られた道具で試行錯誤しながら作製した。

(3) 「暗闇体験」

暗闇での屋外及び屋内の歩行体験を実施し、視覚からの情報が生活に大きく関わっていることを体験から実感することができた。

(4) 「火おこし体験」

メタルマッチを使って火おこしを体験した。みんなが協力し励まし合いながら 取り組んだことで、全員が着火できた。

(5) 「防災クッキング」

限られた水を使用してポリ袋でご飯、レトルトカレーと蒸しパン作りに挑戦した。工夫することで非常食を簡単に調理して美味しく食べられることが実感できた。

13 参加者の声

事業後アンケート結果(6年生:8名)

*満足:100.0% *やや満足:0.0% *やや不満:0.0% *不満:0.0%

「防災ってなんだろう?」 (講話)後のアンケート (参加親子:8組)

○家庭で実施しなければいけないと思う防災対策等

- ・防災グッズの確認
- ・避難時に使用する服や、食料の確認
- ・家族で避難場所や連絡方法などを決めておく。
- ・どの状況(災害)になったらどう行動するかをパターン別に考える。必要がある防災について再度家庭で話し合いをする必要を感じた。
- 自主的に避難訓練を行う。
- ・避難場所や避難経路の確認(ハザードマップの確認)
- ・家具の固定 (耐震工事)

14 事業の成果

「防災って何だろう?」の講話を聞くことで、災害時の行動や対応への考え方が講話前のアンケートの結果 より、今後で何らかの対応をしなければいけないと考える家庭がほとんどで、災害に対して現状を見直す場に なったと実感している。参加者は少人数であったが、それぞれが防災に対しての高い意識を持っていたことが わかった。

講話後の事業では、子供だけの参加であったが保護者同様に高い意識を持ち、設定された状況を理解して、それぞれの活動を行うことができた。

保護者同伴の事業に比べて、今事業では参加者同士の関わりや協力している場面が多く見られ、子供たち一人一人が満足した表情で全日程を終えることができた。

15 事業の課題

活動内容に専門的な技能や知識が求められるものが含まれており、指導者も防災技術のスキルアップが必要で研修等を通して普段から防災に対する技能や知識の習得に努めていくことが大切だと感じた。

工**用**剧(4) (2) (4)







(担当:企画指導専門職 倉松 新)